

常葉大学浜松キャンパス親子教室において実践される 五感刺激による自然体験学習

小野 真裕美

こども健康学科

Learning Through Five Senses by the Stimulation of Nature Practiced in the Parent-Child Class of Tokoha University Hamamatsu Campus

Mayumi ONO

Department of Child Health and Education

要 旨

本研究は、幼児期の活動を自然の中で体験することにより、どのように五感に働き掛け、成長・発達に影響を与えるかを、大学内親子教室にて実践された自然体験活動を通して考察するものである。本親子教室は、大学内に整備されている室内施設、及び、「こどもむら」エリアと呼ばれる自然体験園を活動の拠点とした保育環境の中で運営されており、5月から翌年2月までという、ほぼ1年を通した活動の為、四季折々の自然の移り変わりを活用した保育活動となっている。このことから、自然体験に特化して、教室に参加した子どもの成長や親子の関係性の成長を通し、自然体験の親子に与える影響を検証する。

キーワード：自然体験・五感刺激・親子の成長

Abstract

In this research, I will examine how to influence the five senses and achieve growth and development by experiencing activities in early childhood in nature practiced in Tokoha University Hamamatsu Campus parent-child class. This parent-child class is operated in a childcare environment where the activity base is the indoor facility maintained in the university and the nature experience park called "Kodomo-mura" which means "Children's area", from May to February of the following year. It is a childcare activity showing the transition of nature in every season through one year. From this, we will examine the influence of nature on parents and children through the growth of children who participated in the class and the growth of relationships between parents and children.

Keywords : nature, a stimulus of the five senses, growth of parent and child

1. はじめに

保育の質の高さを求める時、幼児の発達段階での刺激として「五感刺激」が重要視されている。この脳・神経系が急激に発達する大事な時期での視覚・聴覚・触覚・味覚・嗅覚などの刺激は、子どもの健やかな心身の発達に大きな影響を与えることを踏まえ、親子教室での自然体験が子どもの「健やかな体」「豊かな心」を育むために有用である。一生に一度の大切なこの5歳頃までの時期に、脳や神経等の器官が成人のほぼ80%まで発達する¹⁾。

本大学は、子育て支援活動の一環として就園前の子ども（1歳6ヶ月～3歳児）を持つ親子を対象に、親子教室"ポッケ"を運営している。2006年度より開始されたこの教室は、これまでに約450組の親子に修了していただいた。活動期間は毎年5月～翌年2月までの約1年間で、大学内外の専門分野の教授・講師陣が様々なプログラムを提供する。

大学内には自然体験学習園である"こどもむら"と呼ばれるエリアがあり、この自然スペースは雑木林・花畑・田畑・池・川べり・用水路・ツリーハウスなど四季折々の豊かな自然と接することを可能にしている。教室参加者はこの豊かな自然に触れ、年間計画のねらいの重点となる「五感刺激」をからだ全体で十二分に体験する。

高度経済成長以降の我が国の急激な都市化の進展により、都市空間・社会環境が大きく変化し、子どもたちを取り巻く自然環境も大きく変化した。成長過程である子どもの身近な生活環境から、雑木林・田んぼ・畑・池・川などが減り、自然の中で遊ぶ体験も急激に減っている²⁾。子どもでなく30代・40代の親世代も祖父母世代と比べて、自然の中での遊びの体験時間が減り、質も変化している現状がある³⁾。

畑での栽培・収穫体験、海や山での動植物とのふれあいなど、親子での活動だけでは限界がある自然体験活動を質から見直し、親子の活動に自然体験を加えることが重要な子育ての課題である。幸いにも自然体験学習園を

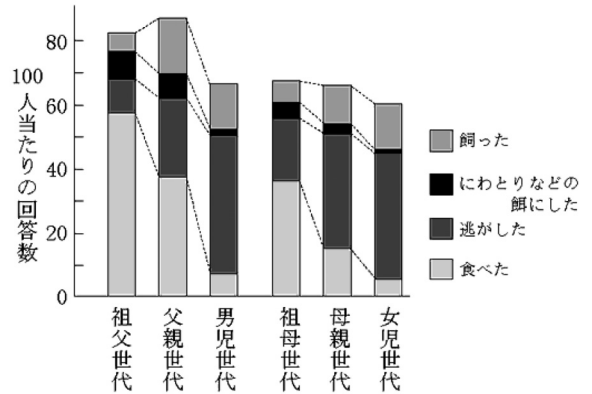


図2. 生き物を「つかんだ後」の処理についての世代・男女比較³⁾

保有する浜松キャンパスではこの体験活動が可能であると考え、積極的に自然体験活動を親子教室のプログラムに取り入れた。実践されたプログラムを事例に、親子の成長にどのような影響があったのか、その変容を考察する。

2. 方法

親子教室指導案のねらいをあげ、教室参加前後の保護者へのアンケートや意見・親子教室での活動等から読み取れる子どもの成長と親子の変容を調べる。

2-1. 親子教室の主な自然体験活動

様々な五感刺激を重要視したプログラムの中で、自然体験学習園"こどもむら"エリアを活用した活動内容

	活動内容	刺激する五感
5月	野菜の種蒔き (写真1)	触覚・視覚
6月	ジャガイモ収穫・蒸かしいも (写真2)	触覚・視覚・聴覚・嗅覚・味覚
7月	朴葉お面・朴葉ごはん (写真3)	触覚・視覚・聴覚・嗅覚・味覚
11月	サツマイモ収穫・蒸かしいも (写真4)	触覚・視覚・聴覚・嗅覚・味覚
12月	どんぐり拾い・落葉アート (写真5)	触覚・視覚・聴覚
1月	大根収穫・大根おでん (写真6)	触覚・視覚・聴覚・嗅覚・味覚
2月	豆乳・豆腐作り (写真7)	触覚・視覚・聴覚・嗅覚・味覚
2月	桜島大根収穫・すいとん作り	触覚・視覚・聴覚・嗅覚・味覚

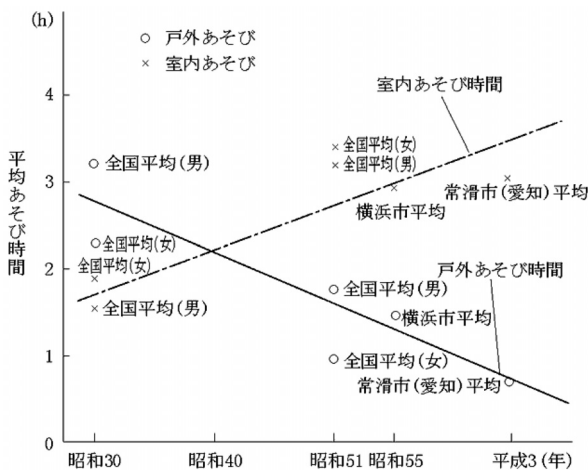


図1. あそび時間の変化²⁾



5月：野菜の種蒔き（写真1）
種を土の感触を感じながら埋める。小さな種が実のなる植物へ変化していく期待感の中、親子で体験する。



11月：サツマイモ収穫（写真4）
親子で収穫の喜びを味わう。同じ土の中から、春のジャガイモとは違うイモが出て来る事の不思議。好奇心の芽が、また一つ増えた。



6月：ジャガイモ収穫（写真2）
土の中から出てくるのはイモだけでなくミミズやダンゴ虫。普段、虫の苦手な保護者も子どもと一緒に頑張れる。



12月：どんぐり拾い（写真5）
色とりどりに紅葉した木々に囲まれてどんぐり拾い。どんぐりだけでなく、様々な色や形の葉も視覚で認識する。



7月：朴葉お面（写真3）
大きな葉に穴を開け、覗くだけの行為から新鮮な視界が広がる面白さに気付く。朴葉の独特な香りが嗅覚を刺激。



1月：大根収穫（写真6）
自分自身で掘り上げた大きな大根を自慢げに担いで見せてくれる。達成感が自己肯定感へとつながる。



2月：豆乳つくり（写真7）
大豆をジューサーにかけ、裏ごしし形を変える。形の変化の面白さは視覚刺激。ゆっくりと煮詰め、味と香りが味覚と嗅覚を刺激する。



ツリーハウスでの読み聞かせ（写真8）
檜の大木の下、涼やかな風を感じながら絵本タイム
室内とは違った解放感の中、大型絵本にくぎ付けになる子どもたち。

2-2.指導案

＜活動計画・指導案＞ ジャガイモ掘りと蒸かしイモ		
流れ	指導員・学生（ポッケのお兄さん・お姉さん）のねらい達成の為の配慮・姿	ねらい、育てたいこと
<ul style="list-style-type: none"> ・教室開始前に収穫しておいたジャガイモを蒸かしておく ・受付 ・自由遊び <p>→単に自由にしている良い時間ではない。限られた空間内（保育室）で起こる人と人との関係、おもちゃを取り合う・譲り合う・言葉を交わす等が起こることで、子どもや保護者間のソーシャルスキルアップのきっかけになる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・片付け ・ポッケの歌「おひさまキラキラ」 ・名前呼称→一人一人手を挙げて返事 <ul style="list-style-type: none"> ・本日の主活動説明「ジャガイモ掘りと蒸かしイモ」 <p>→レジュメを使い、植物学としてのジャガイモの説明。ジャガイモの栄養成分・調理法などの説明をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・トイレを済ませ、戸外に行く服装に替え（帽子・長靴の 	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者からまだ離れることができない子もいる。笑顔で子どもと目線を合わせ「こんにちは、何を作っているのかな？」「面白そうだね」「教えて」「入れて」など声掛けして、子どもの遊びに溶け込む共感的な対応を心掛ける。親子間の遊びの妨げにならないように注意する。教室内で、親がしっかりと子に関わって遊ぶことが重要となる。 ・保護者との信頼関係を作る雰囲気づくりに心掛ける。 ・照れてしまったり、大勢の前で勇気が出なかったり等、まだなかなか返事ができない場合、保護者と一緒にいることを認め、親子がプレッシャーにならないような言葉掛けの配慮する。保護者が子どもの成長を感じ、その成長を子育ての喜びへとつなげることができるような配慮が必要である。たくさんの人がいる中で交流を少しずつ深める。 ・学生は親子の前後の安全を確保して移動する。側溝などに落ちないように注意。車の行き来にも注意する。 ・ジャガイモを蒸かしているところを見て、収穫の後の食べることへの期待感を高める。 ・畑に到着したら、ジャガイモの生育の様子（葉・花など）も観察できるよう植物の姿を見せたり、声掛けをする。 ・土の触感、土のおいを感じる。 ・土の中からイモが出てくるおもしろさを楽しむ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・指導員・学生との信頼関係性の構築→丁寧な保護者への対応・安心感のある教室の雰囲気づくり ・安心感のある教室環境づくり <p>→安心感の中での子育て</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自己確認・他者理解 <p>→ソーシャルスキルの向上</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自然観察 ・自然の中にある色や形の多様性→視覚 ・「サラサラ」「ベトベト」「ザラザラ」など直接に触れ感じる体験→触覚 ・木々や草花、土のおいを感じる→嗅覚 ・驚きや好奇心 ・親子のふれあい ・季節感を楽しむ

<p>着用) 畑に出発。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ジャガイモを蒸かしている様子を観察 ・ジャガイモ堀り開始 ・ジャガイモ堀り終了後、ツリーハウスに移動 ・絵本と手遊びタイム 「おはながわらった」 「あめふりくまさん」 「どんどこどん」 「カレーライス」 ・蒸かしジャガイモを食べる →「いただきます」の声掛け 「ごちそうさまでした」の声掛け ・終了の挨拶 	<ul style="list-style-type: none"> ・自然の中での生き物との出会いも楽しむ。 (キジ・ウグイス・カエル・ミミズ・オケラなど) ・絵本を親の元で静かに聴くことで、遊びの後のクールダウン時間を取る。親も人に絵本を読んでもらう心地よさを味わうことで、絵本を親子で楽しむことの重要性を伝える。 ・室内では味わえない戸外(ツリーハウス)という解放感あふれる環境で絵本や手遊びを楽しむ。(写真8) ・収穫したてで、蒸かしたての湯気の上がったジャガイモのおいしさを味わう。 (蒸かしたイモは塩のみで食し、イモ本来のあまさ・うまみを体験する) ・たくさんの人と共に食する体験をする。 「おいしいね」「たのしいね」など言葉掛を楽しみながら共感的対応を心がけて食事をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・木々の間を抜ける風の気持ち良さや香り、聴こえてくる音 →触覚・嗅覚 ・イモ本来の味を塩のみの調味料で味わう→味覚 ・蒸かしたてのイモの香り→嗅覚 ・蒸かしたてのイモの湯気や形 →視覚 ・「いただきます」「ごちそうさま」の言葉掛け→聴
---	--	---

3. アンケート調査及び保護者の感想

<年度始め教室開始前>

- ・マンション暮らしで庭がないので、土に触れる機会を持ちたい。
- ・自然がたくさん大学内にあるので、戸外遊びをたくさん経験させたい。
- ・野菜嫌いで悩んでいる。畑の収穫体験や教室での食事が野菜嫌いの解消につながると嬉しい。
- ・種を植えたり、水をやったり子ども自身が手を掛けることで、野菜が育ち、やっと思えることができることに気が付いて欲しい。
- ・親が虫や動物が苦手なので、家ではできない生き物との触れ合い体験をして、親子共々、自然に親しむようになりたい。

<年度終わり教室修了時>

- ・家では土に触れる機会が少ないので、ポッケで良い経験ができた。土からミミズや虫が出て来て、親は正直、苦手だったが、子どもがとても興味を持って楽しんだようだ。
- ・芋ほりの後、ツリーハウスで蒸かし立てのサツマイモを食べたのが、とても美味しかった。(写真9) 蒸かし立てのにおいや熱さが食欲をそそり、塩しかつけていないのに子どもがモリモリ食べてびっくりした。
- ・みんなと外で食べるのが、より食欲をそそったよう。いつも、子どもと二人きりの食事が多いので、ポッケに来てお友達と一緒に食べると、食欲が増す様子。お

いしように、たくさん食べてくれると親も嬉しい。

- ・畑に行くまでの道のりで、小鳥のさえずりや水の流れる音が聴こえたり、色とりどりの植物を見ることができたり、草のにおいがしたりと本当に五感が刺激されたと思う。何か鳴いていると「なに？」と聞くようになった。
- ・豆乳と豆腐作りで、何も味付けされていないのに、「おいしい！」と感じた。大豆本来のにおいと味が分かった。
- ・野菜の季節感を味わうことができた。子どもがスーパーで並んでいる野菜に興味を持つようになった。
- ・教室参加前より病気になりにくくなり、丈夫に成長したと思う。外遊びがますます好きになった。



蒸かしイモを食べる (写真9)
みんなと一緒に食べる蒸かしイモはおいしい。蒸かした香りは嗅覚を、味わうイモは味覚を刺激。

4. 結果と考察

<自然に対しての親子の変容>

- ・木の実や草花などを、遊びの素材として使用することにより、視覚・触覚・嗅覚が刺激され、これらに対する興味が増し、思考力の芽を培うことができた。
- ・自然体験学習園で聴こえてくる鳥の鳴き声・カエルの鳴き声などに聴覚が刺激され、生き物が発する音に興味を持ち、好奇心が向上した。

<身体的発達に対しての親子の変容>

- ・滑り台（写真9）などシンプルな遊具で遊ぶことにより、視界の高低や周りの自然の移り変わりを楽しんだりすることで視覚を刺激し、かつ、高い所への登り降りを繰り返すことで、身体的能力が高まった。
- ・戸外活動により外気に触れ、暑さ寒さを体験し、汗腺や自律神経の機能を高め、身体的に丈夫になった。
- ・野菜を栽培し収穫し食することにより、味覚や嗅覚が刺激され、食への関心が高まり、好き嫌いが減った。

<親子関係に対しての変容>

- ・親子で共通の体験をすることにより、喜びや楽しさを共有し、幼児期のさらなる強固な愛着基盤の形成につながった。
- ・親自身が自然環境の中での遊び体験が少ない中、教室において様々な体験をすることにより、家庭での親子で共有する体験の枠が広がり、子育ての楽しみが増えた。



ツリーハウスの滑り台（写真10）
飽きることなく、繰り返し滑り台の上り下りを楽しみ続ける子どもたち。

5. 反省と今後の計画

保護者の感想、子どもの言動の変化などから、親子教室の自然体験学習の実践が、親子共々の心身の成長・発達に有効であると認識できた。しかしながら活動内容は、まだまだ、限られたものにとどまっている。

子どもの成長発達の面だけでなく、保護者である親世代も幼少期に経験する自然体験が不足している。親子教室で親子共に自然体験学習することが、今後の子育てや教育に活かされていく可能性は大きい。その為には、大学内にある自然体験園の活動エリアを、ツリーハウスの拡張・果樹園エリアの造成など、より質の高い保育環境に整備していくと共に、今ある自然環境の保全に努め、今後も様々な自然体験活を親子教室の中に取り入れていきたいと考える。

6. おわりに

自然体験の中で得られる刺激は、視覚・聴覚・触覚・味覚・嗅覚のまさに五感への刺激であり、保護者の感想からも、子どもの好奇心や集中力・共感性・向上心に良い影響を与えているのが感じられるとの意見が多数出た。親子教室を修了した子どもの保護者からは、「幼稚園に進んでからの成長の中で、想像力・集中力・表現力の土台となる経験を親子教室"ポッケ"の活動の中で育んだと思う。」という嬉しい言葉が聞かれた。

昭和30～50年頃の高度経済成長の時期に進んだ都市化の進展が、子どもの遊び場としての自然を減少させた。加えて、テレビ・ゲーム・携帯電話の普及により、戸外における遊びの機会の減少や多様性の喪失、画一化が進み、親世代の自然体験学習も減少した。子どもだけでなく、一緒に活動する保護者の意識も変えることによる、今後の親子の自然体験活動の質や量の改善が望まれる。核家族の増加や環境の急激な変化による自然環境減少の進む現代子育て環境の中、大切な成長過程である年齢層の子育てに関わる責務として、豊かな自然環境を保有する大学内親子教室の運営内容を今後もますます充実させ、親子の健やかな心身の成長に役立てていきたい。

文 献

- 1) 富本靖「幼児期の運動遊び、児童期の体育が成長に与える影響」『昭和女子大学 初等教育学科紀要』No.920、2017年、52-60頁
- 2) 仙田満『子どもとあそび：環境建築家の眼』岩波書店、1992年
- 3) 遊磨正秀・嘉田由紀子・藤岡康弘「水辺の生物相と遊びの時代変遷：3世代アンケート調査から」『環境システム研究』第23巻、1995年、20-31頁
(2017.9.11 受稿, 2017.10.6 受理)